

日本気象学会昭和37年度

総 会 議 事 録

日 時 昭和37年5月10日

場 所 仙台市日の出会館

出席通常会員 111名 委任状総数 110名 書面参加総数 183名 (以上総数 404名)

4月1日現在で通常会員は1667名で、定款第36条による出席会員総数334名、並びに委任状および書面によらない出席会員数67名の条件を満して総会は成立。

次に議長は出席会員の互選によるものであるが、例により山本大会委員長を推すことを一同にはかり、満場一致同氏と決定した。

そこで山本義一氏が議長席につき、総会が行なわれたが、その内容はおおむね次のとおりである。

(1) 正野理事長の挨拶

森の都仙台において昭和37年度春の総会および講演会を盛大に開くことが出来、また久しぶりに珍しいお顔をお互に拝見致しまして、私は大へん喜ばしく感じますが皆様も多分同感していただけるだろうと思います。本会の開催に当り大変な骨折りにになりました仙台管区気象台並びに東北大学地球物理学教室の皆様にも厚くお礼申し上げます。さてわれわれの理事会はこの会をもって解散し次の新しい理事会に引継ぐわけでございますので、われわれの任期中に行ないました仕事を少しく回顧致し、さらにその任期中に得ましたいろいろの経験をお話して将来の参考に使いたいと思います。

われわれの任期中最大の仕事は昭和35年11月上旬に東京において開かれました数値予報国際シンポジウムでございます。このシンポジウムを初め考えました時は、すべてが五里霧中で、一体誰が来てくれるのか、何人位来てくれるだろうか、それをどこから手さぐりすればいいかというような事など全くわかりませんでした。幸い予想以上の参会者を得まして大へん喜ばしい事だと思えました。なおその時に費用はどこからどの位集まるだろうかというような事も大変心配になりましたが、各方面各位の努力により幸いに、予定額を集めることが出来まして非常に感謝して居ります。学会としてはこのような大規模な仕事は初めてのことでありますが、それについてわれわれは大へんに多くの成果を得たと思っております。これは気象庁初め各方面の非常に暖かいご援助と関係者一同の一致協力の賜物であると思っております。私の過去50年間を通じてこんなに感激し、喜ばしかったことはほ

んど記憶にございません。このシンポジウムの proceeding は現在印刷中で600頁を越える位の立派な本になって出る予定でほとんど校了になって、近く皆様のお手元にまいるかと思っております。このシンポジウムには予想以上に論文が集まり、そのために頁数が予定の倍位になり、われわれは嬉しい悲鳴をあげているような次第であります。これが出来たら参加したわれわれ日本の気象学者ことにその方面の専門家および外国の学者にも、その当時の非常に有意義であり、楽しかった会を思い起していただくことだろうと思っております。

次にわれわれの行なった仕事は Selected Met. Papers の発行です。これは関係者の非常に奉仕的な努力により現在好評をもって進行しています。このような事業をやりました結果、われわれは気象学会においても皆さんが協力すれば相当大きな仕事をする事が出来るのだという確信を得ました。このことはこのような事業のみならず学問の研究自体においても、同じような確信をもって進んでいただきたいと思っております。

さらにわれわれのやりましたことは核実験に対する抗議、各国気象機関および気象団体の実験反対の呼びかけです。この問題は各国においても非常に重要な問題でありまして、各団体或いは機関においてはいろいろな関係ではっきりと自分の態度を表明出来ない事情にあるのではないかと思われ、全然反能の無かったようなところもございまして、賛成してくれたところもあります。あるいはデリケートな表現で、回答してくれた所もあります。とにかくわれわれの意向は充分伝わっておることを信じます。アメリカ気象学会からは呼びかけの手紙を出して間もなく、これは非常に重要な問題であるから慎重

に検討してみたいと思うというようなことを云って来たのですが、やっと最近その問題について回答がきました。アメリカ国内としては判っきり云いにくいのではないかと思えるような事も考えられ、回答には非常に苦心したあとがございます。そのようなわけでわれわれとしては決して単に空弾を打ったとは考えられず、非常に深い影響を与えたと思いますが、現実には必ずしもわれわれの希望通りにはなって居りません。ですが私個人としてはきっと良い方に向うだろうと信じて居ります。と云うのは人間が人間を絶滅するような馬鹿なことは決して無いだろうと信じるからですが、偶発戦争というようなこともございますから、核兵器は世の中から無くする方向に進むべきだろうと思います。われわれの力で今のところどうにもなりません、とにかくわれわれは世に先んじて世を憂う学者として充分やって来た積りですから、後は関係方面で充分考慮と行動をされなければいけないと思います。日本は東西の谷間にありまして、いろいろと難しい問題がありますが、政治に国境はあっても気象には国境がないのですから、われわれ気象を中心に集まっている団体としては、すべての国と仲よくやって行かねばならないと私は信じています。

以上のような仕事の他に定常的な仕事もこの理事会の任期中にやって参りました。常任理事会は毎月一回集まり、夜の9時過ぎになって会場を追い出されるまでいつも熱心に仕事をして、学会に対していささかの貢献をしたものと、我々は自画自賛かも知れませんが、自負して居ります。と申しましてわれわれがやり残した仕事は無いぶん有りますので、これは次の新しい理事会に引き続いてやっていただく事と思います。本年度は創立80周年に当たりますので、記念事業の第1として気象研究ノートの特別号を1年間出して行く計画があります。第2は中共の代表を2人位お呼びしたいと考えております。それから事務体制の強化と云う事ですが、これは学会の円滑な運営と発展のために是非とも必要なことです。部屋の問題になると気象庁の新庁舎の完成と関係しますし、費用の問題になると会費の値上げとも関係しますので、我々の理事会ではそれを完了することは出来ませんでした。その他に分科会を作る問題、選挙の方法と云うものも研究していただかなければなりません。それから一部定款の改正を次に提出する予定ですが、定款の改正と云う問題は本来新しい理事会で新しい方針のもとにやって行くべきものと思います。けれども現在のところ改選期と総会の開かれる時期があまり適当でないので、

改選時期と会計年度をどうするかと云う相互の問題も残されています。理事会の選挙の事です。学会と云うのは申すまでもなく気象学の進歩と気象技術の発展と云うことを目的とした学術団体ですが、実際の事に当りますといろいろ考え方の違いがございます。ある人はこういう問題は気象学会で取り上げるべきでないとか、ある人はいやこれは非常に重要であると云うようないろいろ考え方の違いがあって、私は大抵そのような場合、自分なりの考えがあっても、皆さんの意見で妥協点に達するまで待つて決めて行くようにして参りました。私の根本の考えは、われわれは皆自然と云うものを探究している協力者なのだと思ふことで、そう云う態度を取って来たのであります。

それから学会には非常に事務的な事が多く、これは実際に理事会にお入りになって担当していただかねばわかりません。これらの事務は学会の推進発展のためにはどうしてもやらねばならないことで、それを怠ると学会は萎縮してしまいます。そのために、事務局の事務を進行するために有給事務員が必要になるのですが、その上に理事には有能で精力的に働いていただける人が欲しいわけです。又学会を推進して行くためにはどうしても新進気鋭で新しい知識を持ち、新しい学問技術の進歩に理解の有る人が理事会に入っていただきたい。なお実際の計画を実行するに当りましては気象学会の周りの環境と云うものを良く理解することも必要かと思います。このようないろいろな要素を理事が持っていることが理想ですが、1人ではとても出来ませんから、いろいろな人が集まってお互いに短所を補って行くようにして円満な理事会を作っていただきたいものです。そのような意味で成るべく沢山の適任者が交替で、理事になって貰い度いものです。今回の選挙はもう終わったと思ふからこの次には是非選挙と云うものに皆さんがもっと関心をよせていただき度い。かりに不適當な理事を選挙したとしますと学会は忽ち衰えてしまうだろうと考えられます。

本来外国の例、殊に英国などでは President address と云うものは学問の進歩と云うような事を話すようですが、私は今回は事務的な事ばかり申しました。ですが気象学会理事会としても日本気象学はどういう方面に進んで行くべきかと云う事を議論し、あるいははっきりした意見を持つような何らかの措置をとることも必要ではないかと思ふます。こういうような事を我々は任期を通じて感じたものですが、われわれが安心して仕事が出来ましたのは、皆様のご後援と信頼によるもので厚くお礼申

上げます。これをもって簡単でございますが現理事会として最後の総会挨拶と致します。

(2) 学会賞授賞式

柳井迪雄氏に本年度学会賞授賞にあたり、正野理事長から下記授賞内容の紹介があり、満場拍手のうちに同氏に賞状ならびに賞牌が授与された。

ご承知のように台風の発生につきましては非常に沢山の研究がありますが、発生期が何しろ海上ですから観測データの思わしいものがないので色々な説が出てまだはっきり決って居りません。柳井君はマーシャル群島海域の普通の観測とアメリカ空軍の特別観測資料を基にして、台風の発生初期の状態を非常に詳しく量的に解析して、偏東風の波が渦巻まで変わってゆくプロセスを問題のない位すっきりと示しました。それから同じような偏東風の場でも、渦巻まで発達する場合と発達しない場合に、どういう違いがあるかと云う事も調べています。ただその研究は3日間の追跡で一例ですから、その他の場合にどうなっているかと云うことについては分かりませんが、少なくともその場合については確かに我々にいろいろの説が出ておりましたのをすっきりさせた点で貢献したと思います。

なお最初続けてやっている研究ではいろいろな例をやって大体同じような結果が出て結論に誤りがないことを示しております。それから理論的な研究としては台風型の擾乱が発達する場合の Criterion をだしまして、従来単に parcel 的な stability だけが重要視されて居りましたが、それではなくて baroclinic な分布が発達に非常に重要であることを示し、そして発生の Process のモデルを提出しました。このように理論と実際の解析との両方面から研究し非常に立派な仕事を致したのであります。それから中緯度に達しますと、台風は衰えますが、それを詳しく追求した立体解析から、前線が形成されて温帯低気圧に変わって行く Process も数量的に調べました。

要するに柳井君の研究は量的な解析と理論を通じまして台風の発生過程に対する一つの物理像を画いたもので、気象学に対して非常に貢献したものとして本年度の気象学会賞を贈ることに致しました。

(3) 昭和36年度事業経過報告

淵 理事

現在会員数は1667名で昨年より60名の増加である。国

際数値予報シンポジウムのプロシーディング、外国文献集、80周年記念事業としての気象研究ノートの特集号については正野理事長の挨拶に譲る。国際学術交流委員会では1昨年9月に発足し、昨年7月には畠山久尚氏を顧問にお願い、日中学術交流については目下鋭意促進中である。アメリカ気象学会の文献速報については昨年10月から航空便で資料提供を開始した。また昨年秋には「大気海洋間エネルギー交換に関するシンポジウム」を日本海洋学会と共催で開催した。気象用語集についてはまだ文部省でとまっていた発刊は少し遅れる見込。

(4) 昭和36年度決算報告

吉武 理事

吉武理事から別紙内容 29 頁の通り説明があり、監査結果を監事より報告されたいとの意見があったが、同理事より監査終了済みの答弁の後満場一致可決された。

(なお書面参加で否とするもの1名)

(5) 定款一部改正に関する件(I) 審議

吉武 理事

(I) 会費の値上について

印刷費及び通信発送費が値上りの状態にあり、会費を2割程度値上げする必要を生じた。また「気象研究ノート」経費120万円のうち約77万円を支払ったのみで残額43万円は今年度経費で支払わねばならぬ状態である。上記2件の不足分約50~60万円を補うため、次のとおり値上げする必要がある。

A 会員 1080円 → 1320円 1/12=110円

B 会員 2040円 → 2400円 1/12=200円

団体会員 1500円 → 1800円

これにより約60万円の増収になる。

質問：値上げは4月に逆のほってするのかわか

答：日本気象学会は法人であるから会費改正については本日の総会で可決された上、文部省の認可が必要でありその後実施するのが順当であるが、現在の実情が苦しいための値上げであるから4月からの値上げを了承して貰いたい。

これについて書面参加のうち否8を除き、その他は全員賛成で可決。

(6) 本年度事業計画ならびに予算案審議

吉武 理事

吉武理事から別記内容 30 頁のとおり説明があり、全

員賛成で可決。(書面参加で否とするもの3名)

(7) 定款一部改正に関する件(II) 審議

正野 理事

(II) 評議員判定について

正野理事長から諮問機関として評議員の制度を設けたとき旨説明した。

質問(伊藤博): 評議員は会員の中から選ぶのか、会員外からも推せんを考えているか。

答(正野): 会員外から選ぶことは全然考えていなかったが、なお良く理事会で考えて貰う。

質問(寺田一彦): 定款のよりどころはどこか、どのような形に改正するのか。

答(淵): 「天気」Vol. 9, No. 4, p. 148 を読み上げて了承を得た。

質問(奥田穰): 評議員は何故必要かもっと具体的に説明を求めたい。

答(正野): 新しい事業の経理, 種々の寄付行為, 外部からの学会賞の選考照会等の場合, 学識経験者に評議員をお願いしておいた方がスムーズに行く。

質問(磯野謙治): 評議員は理事会で推薦するのか、又その権限は?

答(正野): 理事会をお願いするのである。又あくまで諮問機関であって運営に関しては干渉しない。

これについて書面参加のうち否3名を除き、全員賛成で可決。

(8) 学会費受賞者選定規定一部改正に関する件審議

淵 理事

岡田賞は今年秋は中止となり、近く制定される予定の藤原賞は賞金は5万円に予定されているので、これにならって学会賞も5万円にしたとき旨説明があり、書面参加のうち4名を除き全員賛成で可決。

(9) そ の 他

(イ) 来年度の当番支部に関する件 本部提出

来年度は関東, 甲信越, 中部地方が当番になっている。東管の藤田理事に取り進め方お願いしたい。

藤田: 当地方には支部がないので、東管台長の承認と協力及び本部の協力を条件としたい。

畠山: 東管台長として出来るだけご後援致したい(拍手)。

正野: その時の本部理事長は誰になるか判らないので(選挙の結果決定するが)、現理事長としては確約は出来ないが、協力していただけるものと信じている。

議長: 理事長は協力される立場と思うので、東管台長が協力して下さると言う線で、藤田地方理事の方でよろしく取り進め方お願いしたい。

(ロ) 科学協力に関する日米委員会について

説明: 正野理事長 (別紙プリント配布)

この日米委員会では太平洋学術調査の面で協力しようとするもので、特に米国側では津波, 台風, 地震などで共同研究を希望している。米国のC, ケリー博士が関係している。台風についてなら気象研究所の台風研究部の方が良い。ルーチン業務にはタッチしない。気象庁は人手が無いので協同観測と云う形のものには協力ができぬかも知れない。研究だけと云うことである。データーのみを貰い解析研究したいと云う幾分消極的な態度である。そのうち科学技術庁の方から、予算の要求を出すようにと云って来た。仮りにやるとすれば委員会を持って、いろいろの問題をとり上げて行くようにしたいと考えている。現在は学問上の問題点を上げ、日米両者の希望を述べ合う段階であり、機関としてではなく、研究者同志が主体として話を進めて行きたい。

議長: 本日は理事長から単に経過説明を聞く程度で、決をとることはしない方が良かったらう。質問応答に止めたい。

質問(?氏): この件は将来政治的に結びつく恐れがあるので、日本気象学会としては可否を決めることは学会の立場を苦しくする。気象学会の自主性を尊重すべきだ。a. 研究の環境, b. 予算のつかぬ仕事, c. WMOで推進すべき性質のものか、などについて考慮していただきたい。

正野: WMOにはふれない。将来に対する疑問については慎重にしたい。しかし今のところ詳しいことは分らない。あくまで研究者を主体としたもので人員が不足なら止めれば良いと云う態度である。研究の環境については坪井委員が帰国すればもっと具体的に判るだろう。地球物理学の委員会は情報連絡をもっているから知らせる義務がある。気象学会は政府が決定したから従わねばならぬと云うことはない。自主性は充分保たれている。気象学会は中国との交流を円滑にしたいと思っているが、それを乱し

てもいけない。政治には国境があっても気象学には国境はない。中国にも米国とも円滑な交流を計り双方が協力して気象学の発展につくすべきと思う。

岸保：理事長の話のように現在は具体的に判然とした情態ではない。判明次第総会等で討論するよう便宜を計っていただきたい。

神山：5月24日池田、ケネディ会談で既に決定した安保条約に関係しているし、又昨年12月学術会議でも決っているようだ。研究者がやり度くないなら、や

らなくても良いと云うものではないのではないか。

正野：個々の問題は研究者レベルで進めて行きたい。学術会議では全員賛成ではないが決定している。もう少し具体的になってからでないか何とも説明しかねる。

議長：この問題についてはもう少し事情が明らかになってから話し合う機会を作りたい。本日は我々がこの問題の内容について知識を深めたと云うことで終り度い。 14時43分終り。

昭和37年度 日本気象学会賞受賞者推薦理由書

台風の発生、発達、衰弱に関する研究

柳井迪雄氏（気象研究所台風研究部）

柳井迪雄氏の研究の内容を大別すると、発生期の解析、発生及び発達の理論的考察、衰弱期に於ける構造の変化の解析である。

台風が発生に関しては従来多くの研究があるが、発生域が熱帯海上にあるために、観測資料が充分得られず、統一の見解に到達していなかった。柳井氏はマーシャル群島海域の通常観測・飛行機観測及びアメリカ空軍で行なった特別観測等の資料を出来る限り蒐集し、それを利用して、所謂台風の卵といわれる初期の台風の状態を詳細に量的に解析し、その生成の経過を明らかにした。それにより偏東風波から渦巻化してゆく様子及び台風にまで生長する波と未発達に終る波との差違も明らかになった。解析の結果は一つの台風を3日間追跡したもので、総ての台風が同じ経過をとるものかは判らない。しかし従来断片的知識より憶測される程度に止まっていた台風の発生に関する知識を解析によって実証し、纏めあげたことは極めて大きい意義をもつものである。

理論的研究面では台風型擾乱の発達に関する規準の吟味を行ない、台風は順圧的渦動の発達ではなく、傾圧的渦動の発達であることを詳しく論じ、更に前記解析に基づいて、台風の発生及び発達過程のモデルを提出している。又、これらの研究において、台風の渦の強さ、気温

分布、水蒸気量に関する量的扱いはまことに美事であり、解析と理論をたくみに結合した技術は高く評価されている。

中緯度にはいった台風は次第に衰え、熱帯性低気圧から温帯性低気圧に変化する。柳井氏は日本付近を通過した台風について、構造の変遷を詳しい立体解析により追跡し、前線の生成、暖かい内域の収縮を数量的に示した。

要するに柳井氏の研究は、量的解析と理論とを応用して、台風発生機構に関する一つの物理像を作りあげたもので、気象学に対して重要な貢献をしたものと考えられる。

論文目録

- 1) On the changes in thermal and wind structure in a decaying typhoon. *Journ. Met. Soc. Jap.*, Vol. 36, No. 4, pp. 19-33.
- 2) A detailed analysis of typhoon formation. *Journ. Met. Soc. Jap.*, Vol. 39, No. 4, pp. 187-214.
- 3) Dynamical aspects of typhoon formation. *Journ. Met. Soc. Jap.*, Vol. 39, No. 5, pp. 282-309, 1961.

昭和年36度収支決算書

収 入 之 部			
科 目	合計金額 (円)	内 訳	備 考
会 費	2,827,236		
雑誌・図書領布	1,579,344		
気象研究ノート		1,224,892	
そ の 他		354,452	
雑 収 入	95,311		
文部省助成金	100,000		
外国文献集	1,563,840		
前年度繰越金	285,266		
合 計	6,450,997		

支 出 之 部			
科 目	合計金額 (円)	内 訳	備 考
印刷編集費	3,063,205		
気象集誌		1,016,820	Vol. 39 No. 1 ~ Vol. 40 No. 1
天 氣		1,272,265	Vol. 8 No. 4 ~ Vol. 9 No. 3
気象研究ノート		774,120	Vol. 12 No. 2 ~ Vol. 12 No. 4
図書購入費	101,642		
発送通信費	597,132		
会 議 費	266,864		
総会・大会費		90,000	
役員会費		106,864	
例会費		45,000	
外国委員会費		20,000	
選挙管理委員会費		5,000	
学会賞	45,000		
支部交付金	104,000		
事務費	597,428		
職員給与		170,150	
物品印刷		195,394	
雑 経 費		231,884	
旅 費	61,800		
外国文献集	1,241,792		第3巻~第10巻
職員退職積立金	30,000		
次年度繰越運転資金	342,134		
合 計	6,450,997		

基 本 金 650,000 変化なし
 職員退職積立金 50,000

昭和37年度予算書

収 入 之 部			
科 目	合計金額 (円)	内 訳	備 考
会 費	3,420,000		会員 1,650名 A 1,250 B 400 団体 450 会費 年額 A 1,320円 B 2,400円 団体 1,800円 (1口につき)
雑誌・図書頒布 気象研究ノート	1,630,000	1,360,000	個人 120×900×10 団体 150×100×10
そ の 他		270,000	
雑 収 入	100,000		
外国文献集	1,950,000		
前年度繰越運転資金	342,134		
合 計	7,442,134		

支 出 之 部			
科 目	合計金額 (円)	内 訳	備 考
印刷編集費集誌 気象集誌 気象研究ノート	3,520,000	1,080,000 1,440,000 1,000,000	Vol. 40 No. 2~Vol. 41 No. 1 Vol. 9 No. 4~Vol. 10 No. 3 Vol. 13 No. 1~Vol. 14 No. 1
図書購送 象研究ノ一ト 入信費	150,000 640,000	222,000 120,000 200,000 100,000	気象集誌 天 氣 気象研究ノ一ト そ の 他
会 議 費 総 会 費 役 員 會 費 例 外 委 員 會 費 学 術 交 流 委 員 會 費 選 舉 交 流 委 員 會 費 部 交 流 委 員 會 費 支 部 交 流 委 員 會 費	250,000	90,000 80,000 45,000 20,000 10,000 5,000	
学 支 事	25,000 110,000 600,000		
給 印 費		200,000	
刷 費		200,000	
給 印 費		200,000	
外 國 文 献 集 費	1,665,000		9冊分印刷, 発送
旅 子 備 費	50,000		
費	100,000		
次 年 度 繰 越 金	332,134		
合 計	7,442,134		

基 本 金 650,000 変化なし
 職 員 退 職 積 立 金 50,000